広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要
〈第63号　2016〉

和歌の特徴を考慮した系統的なアプローチの一試案

三　根　直　美

和歌は古典文学作品のほとんどにでてくるが、その学習目標はシラバスに明確に記載されていない。加えて、生徒にとって和歌を理解し鑑賞することは難しい。その理由の一つは、和歌はわずか三十一文字で構成されており、和歌に含まれる情報は十分とは言えないからである。また、和歌のメッセージは様々な修辞技法によって表現されているのも理由の一つである。本研究では、検定教科書の和歌を分析し、一つの指導アプローチが提案されている。具体的には、『伊勢物語』、『土佐日記』、『今物語』、『大和物語』、『源氏物語』、『無名抄』、『蜻蛉日記』、『紫式部日記』に含まれる和歌を①和歌のテーマ、②和歌の読み手と受け取り手の人間関係、③修辞技法の観点から分析した。その結果、以下のことが明らかになった。（1）和歌のテーマは多岐にわたっている、（2）和歌は様々な形式で詠まれている、（3）多様な修辞技法が用いられている。数多くの種類と形式の歌が教科書では扱われているため、生徒の理解を促すために、授業者は和歌の指導の際には明確な目標を設定する必要がある。加えて授業者は和歌を系統的にかつ段階的に提示して、授業をしていく必要があろう。

一　はじめに

古典と言えば和歌が必ず出てくるが、理解しようと思うと、まず修辞技法などで難しく感じて抵抗を持ってしまう。小学生でも五色百人一首などに親しみ、漫画や映画でも競技百人一首への関心が高まる時代に、通常の授業で抵抗感なく、その魅力に触れられないものだろうか。高校一年から三年まで出会う多くの和歌を取り上げ、系統を意識した上での和歌の魅力に迫るアプローチの方法を考えてみたい。

二　和歌が含まれた、代表的な教科書教材

次にあげるのは、筆者が授業で取り扱った和歌が含まれた代表的な教材の一覧である。万葉集など和歌集は今回は除いた。和歌単体よりも、地の文によって背景や状況が入っている方が理解しやすいと考えたからである。

学年	教科書会社	教材名・作品名	学習の中心とすべきテーマ・修辞技法
高一	国語総合（筑摩書房・大修館等）	1『十訓抄』「大江山」	切り返しの妙・掛詞
		2『竹取物語』「帝の求婚」「かぐや姫の昇天」	×
		3『伊勢物語』	×
		（1）「筒井筒」	成就した恋、愛を取り戻した歌、拒絶された歌
		（2）「梓弓」	序詞、究極の状況での和歌
		（3）「東下り」	最期の和歌
		4『土佐日記』「忘れ貝」	折句・掛詞、縁語　余興から感動させる
			悲しみを共有する者同士の唱和
高二	古典B（第一学習社）	5『伊勢物語』「初冠」	本歌取り
		6『今物語』「やさし蔵人」	後朝の歌
		7『源氏物語』「若紫」	心を共にする主従関係のやり取り
		8『大和物語』「苔の衣」	戯れのやり取り

高三	古典A（第一学習社）	9『無名抄』（1）「関路の落葉」（2）「深草の里」 10『蜻蛉物語』「うつろひたる菊」 11『紫式部日記』「若宮の誕生」	似たことばを使っても趣向を違わせた和歌 本歌取りの効果 真剣な歌にすかす返歌 苦しい思いを吐露する独詠歌

三　授業の実際

1「大江山」当意即妙な切り返し、意外性　掛詞を中心に

古文の入門教材として扱う説話である。女流歌人で有名な和泉式部の娘である小式部内侍が、歌合に出ることを命じられた際、歌人藤原定頼に「歌はもう出来ましたか。（母のいる）丹後へ使いは出しましたか。」とからかわれ、すぐさま詠んだ逆襲の和歌である。母の教えがないと歌を詠めないだろうとからかった定頼は、小式部の詠んだ歌に圧倒されて、返歌も出来ずに逃げ去ってしまう。

1 大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立

入門期であるにも関わらず、和歌に掛詞が多く出てくるので授業をする上で難しいと感じていたが、逆に掛詞に着目してそれが小式部内侍の技量・力量であることがわかると和歌が際立ってくるのではないか。

「大江山」でうたい出し「生野」そして国府に近い「天の橋立」と、道中の地名を三つも並べ、掛詞の連接を使って「大江山を越えて行く」「生野」と丹波までの旅程が遠いことを説明します。だからいまだに天の橋立をこの足で踏んでみた経験もない、と表面上はあくまでも丹後までの距離感を前に押し出して一首をまとめています。ところが実は、掛詞を用いることにより「踏みもみず」に「文も見ず」の意味を持たせ、表の意味とは別に、母親の助けなど必要ないと言外に強く主張していたのです。（注1）

相手が逃げ去るほどの威力を持った和歌の技量を確認していくことで、入門期といえども、その面白さは伝わるであろう。

※板書　ゴシック部分は色チョーク

二

定頼中納言

1　たはぶれて　母に代作を頼むためにあなたが

「丹後へ遣はしける人参りたりや。」

3　あさましくて　「こはいかに、かかるやうやはある。」見事な歌を即座に詠めた

×返歌　逃げられにけり

からかい　見くびっている

意外　恥ずかしい

2　袖をひかへて　**普通しないはしたない行為**

掛詞 a生野　b行く

大江山　いくの の道の　遠ければ

掛詞 a踏み　b文

まだふみもみず　天の橋立

訳

a　大江山から生野への道は遠いので、私はまだ天の橋立へも訪れていません。

b　母のいる丹後へ行く道は遠いので、母からの手紙も見ておりません。（母の助けなど必要ない）

小式部内侍

作者

これほどの歌、ただ今詠み出だすべしとは知らざりけるにや。（あらむ）

意図

人を侮ってはいけないよ。

小式部の才能のすばらしさを語る

歌人としての風流さ、あり方を示した

2 『竹取物語』贈答歌の体をなさないやり取り

国語総合で、「帝の求婚」「かぐや姫の昇天」を扱ったことがある。高校一年生の早い時期に設定されている教材だが、敬語が多く出てくることもあって扱いづらい教材だと感じていた。

出てくる和歌は、「帝の求婚」の

2 帰るさのみゆきもの憂く思ほえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ（帝）

3 葎はふ下にも年は経ぬる身の何かは玉のうてなをも見む（かぐや姫）

の贈答歌である。

帝は「帰途の行幸がもの憂く思われて、つい振り返ってしまって心が残る。私の言葉にそむいてあとに残るかぐや姫ゆえに。」と恨みがましい思いを訴えるが、かぐや姫の返歌は「葎がはい広がっているような粗末な住居でも長年暮らしてきた私が、どうして今さら玉の御殿を見る気になりましょうか。到底そんな気になれません。」と身分差を盾にはっきりと帝を拒否する内容となっている。

実際の授業では、ワークシートによって和歌の読解をしたが、それぞれの和歌を訳しただけで、互いの思いのやり取りという押さえまではできなかった。この贈答歌が唱和しているように思えなかったからだ。

また、かぐや姫が昇天する前に帝に対して詠んだ歌、

4 今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出でける

では、帝への愛情が吐露されている。

しかし、3の和歌について谷（2012）は、

続く地の文は不思議である。

ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。

和歌に続く地の文では、帝ではなく、翁を想う心が消え失せたとしているのだ。和歌においては帝に対する心情が描かれていたのに、直後に続く地の文では翁への心情に変化しているのだ。これもまた、和歌と地の文の矛盾ではないか。

かぐや姫の二首の和歌も帝の和歌同様、贈答歌の体をなしていない。難題譚の和歌はおおよそ贈答歌の体をなしているのに、帝とかぐや姫の和歌は一見すると贈答に見えないのだ。前の歌を受けることばがなく、独立している。（注2）

と指摘する。

地の文と和歌は、甚だ矛盾しており、通常の恋物語とは異なる関係性を示している。本来物語には和歌はなかったが、どこかの段階で恋歌の定型に則って、はめこんだのである。こうしてみると、『竹取物語』は、和歌がない形の方が物語としては完成度が高いとさえ言えるのだ。（注3）

と『竹取物語』について評価している。多くの教科書で取り上げられているものではあるが、高校一年生の教材として適切かどうかも考慮すべきではないかと考えられる。和歌の扱いについても同様である。

3 『伊勢物語』

（1）「筒井筒」 恋を成就させた和歌の贈答、夫の愛を取り戻した和歌、見限られた和歌

「筒井筒」では、井戸のそばで遊んだ幼馴染の恋とその成就が描かれている。きっかけとなった和歌は、

5 筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに（男）

6 くらべこし振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずしてたれかあぐべき（女）

の贈答歌である。妹―君と親愛をこめた呼び名が使われ、互いに幼い頃の思い出をちりばめ、自身の体の成長を相手に告げる。相違点としては、男が一人前の男に成長し、あなたに求婚できる状態になったという宣言なのに対し、女の方は結婚はあなたしか考えていませんという強い思いを直情的に伝えている点である。ワークシートの左右に5・6の和歌を配し、共通点、相違点を探ることを通して、贈答歌として唱和し合っていることを確認できる好教材である。

※ワークシート〈実際のものは括弧の中が空白。完成した形が次のもの〉

■和歌に込められた心情を探ろう。■

歌

男

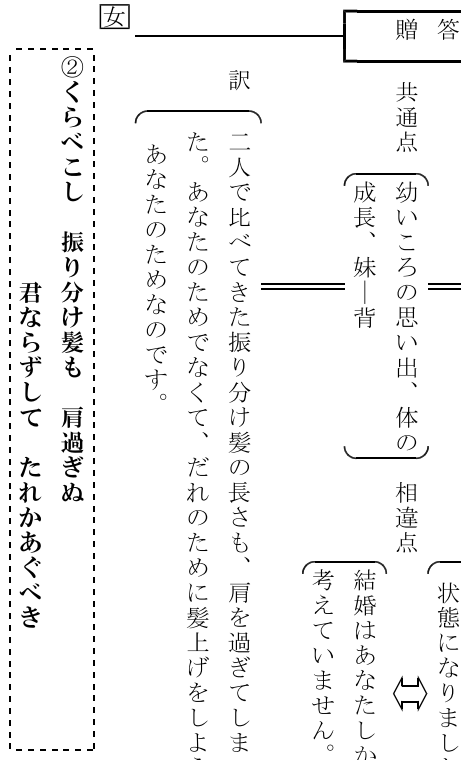
①筒井筒　井筒にかけし　まろがたけ
過ぎにけらしな　妹見ざるまに

訳

井戸の囲いで測り比べた私の背丈も、今ではすっかりその枠を越えてしまったようです。あなたにお会いしないうちに。

あなたに求婚できる

三



幼馴染の恋が成就した二人であったが、女の親が亡くなり、貧乏になった状況から、男に高安の女（新しい妻）が出現する。そこへ行く男のことを想い、一人家で女が詠む独詠歌も、秀逸である。

7風吹くと沖つ白波たつた山夜半には君がひとり越ゆらむ

「いとよう化粧じて、うちながめて」からは、男を送り出すときは何事もないように気丈に振舞っているが、崩れそうな心を支えるために化粧をし、それでも物思いにふけって、恨みごとを言うのでもなくただただ男の身を案じる無償の愛を吐露する歌に感動し、男は高安には行かなくなる。

たまたま高安に来てみると、全く気を許して優雅な振る舞いはしなくなった女に幻滅し、高安の女から、

8君があたり見つつを居らむ生駒山な隠しそ雨は降るとも

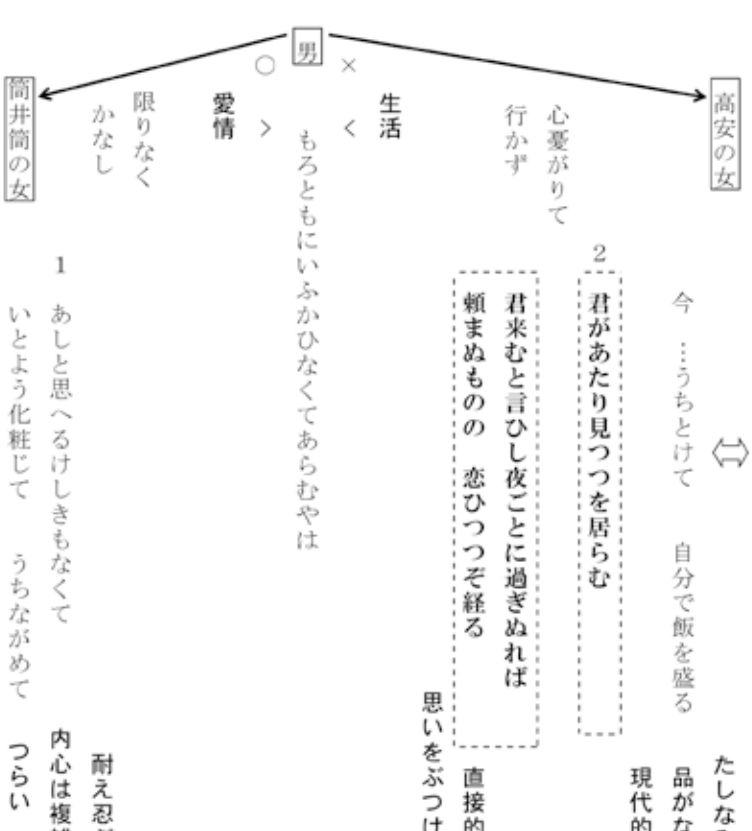
9君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る

と二回も和歌を送られても男は返歌すらしなかった。

ここでは、なぜ高安の女には幻滅し、もとの女に戻ったのか、和歌と地の文を参考に、その違いを考えさせた。高安の女は正直で純粋な人であったが、たしなみがなく、品がなかった。これは現代的とも言えるが、ひたすら自分の思いを相手にぶつけて訴える、戦略が全くない女である。もとの女は、古風で、身だしなみも人が見ていないところでもしっかりして、奥ゆかしさや教養があり、健気で献身的な耐える女と言えよう。高安の女の和歌には技巧がないが、もとの女の和歌には序詞が用いられている。

※板書

○男はただ身勝手なだけだったのか。



7の序詞に注目すると、渡部（２０１４）の指摘が授業でも扱えないだろうか。

「風吹けば沖つ白波（たつ）」は、響きは美しいですが、海の沖に（岸辺ではなく）白波が立つのは海が大荒れの時ですから、実は普通ではない危険な

四

情景を表しています。そのイメージを「竜田山」に重ね合わせると、危険な竜田山を、夜半に、しかも一人で越えている夫の身を案じる歌となるでしょう。一方、荒れ狂う海のイメージを作者である本妻の心情にまで広げて解釈すれば、表面上は何気ないそぶりをしている本妻の心に渦巻く物思いや嫉妬の歌となるのです。おそらくそのどれもが正解で、だから男は新しい妻のもとに行かなくなったのでしょう。（注4）

（2）「梓弓」心情が表出した和歌　序詞を中心に　最期の独詠歌

「梓弓」では、男が宮仕えに行ったきり三年帰ってこなかったので、待ちくたびれた女は「いとねんごろに言ひける人」と再婚するその夜に、もとの男が帰ってくるという悲劇の場面で、和歌が詠み出される。夫の意気揚々とした「この戸開けたまへ」の声に対して、女は歌を返すしかない。それは精一杯の心の叫びであったのだ。夫への深い愛情は変わらないが、新夫との約束をした今となってはどうしようもないが、ただ事実のみを伝えるしか出来ない女である。

10 あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ

それに対して、ひどい衝撃を受けたであろう男は虚勢や強がりではない、悲しみや自責の念の渦巻く中でも、女への本能的な深い愛情を吐露する。

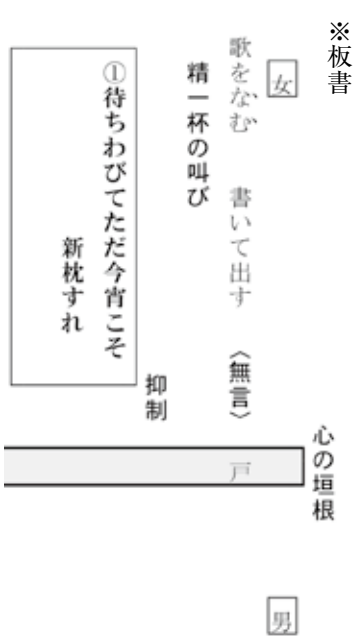
11 梓弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ

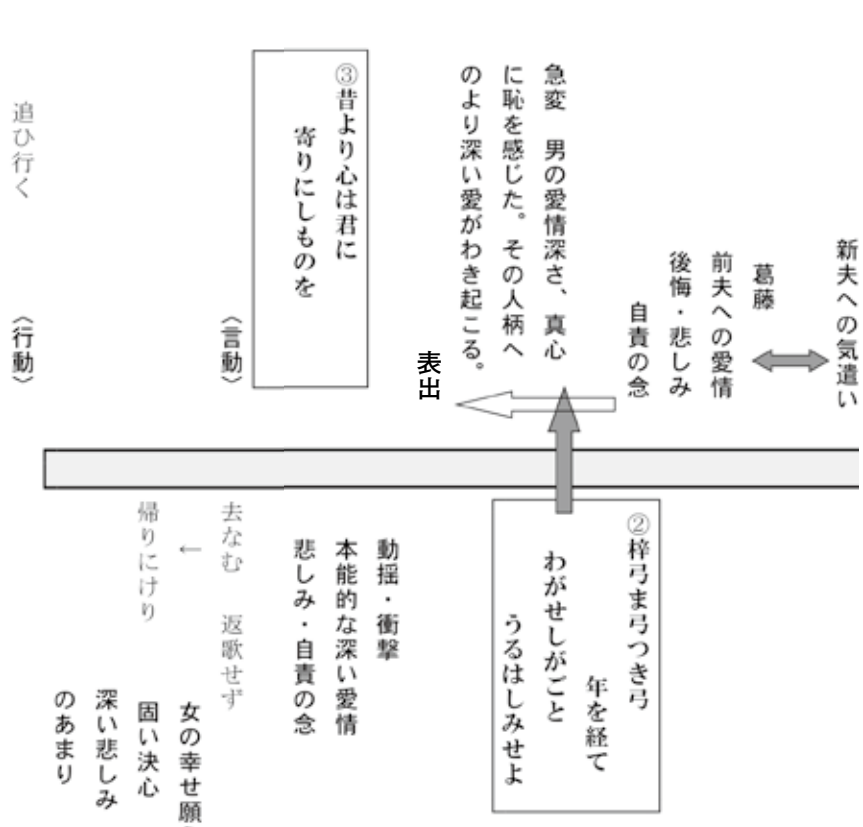
この男の歌で男の愛情深さを感じ、その人柄への深い愛情がわき上がり、何とか保っていた女の心の垣根が崩れて、心情が表出してしまう。

12 梓弓引けど引かねど昔より心は君に寄りにしものを

しかし、男はその歌を聞いたか聞かぬか、返歌もなく、去ってしまう。

※板書





女は男を追うが、追いつけず、清水のある所で倒れ臥してしまう。そこで、指の血で岩に書き付けた歌が、

13 あひ思はで離れぬる人をとどめかねわが身は今ぞ消えはてぬめる

である。愛が伝わらなかった女は、死ぬという結末を迎える。13では全く技巧が用いられていないことから、全ての思いをぶつけていて、考える余裕が全くなかったことがよく分かる。「心は君に寄りにしものを」の序詞「は」より、愛の心が伝わらなかった女は身の破滅しか残されていない。助動詞「めり」を推量と取れば女の意志の強さと取れるし、婉曲と取れば意志と迷いとも考えられる。我が身体の事なのに、感じ取れないほどの悲しみであっ

五

たことがうかがえる。

１９９８年の授業実践では、「梓弓」の使われた意味、序詞、枕詞など修辞技法の意図や効果など、図書室で調べ学習をして、一人Ｂ５一枚にまとめた資料を提出させて、授業を行った。全九時間かかったが、高校一年の生徒にここまで深い考察が可能であるのだという驚きをもった。「三年」という期間の意味、「名詞」や「動詞」に着目したり、技巧が使われている歌と使われていない歌の比較、和歌四つの変化に着目したりと、学習課題も多岐に渡った。修辞技法の使われている意味やその効果について学習する、好教材である。

（３）「東下り」　折句、掛詞、縁語　余興で詠む歌　人の心を感動させる歌

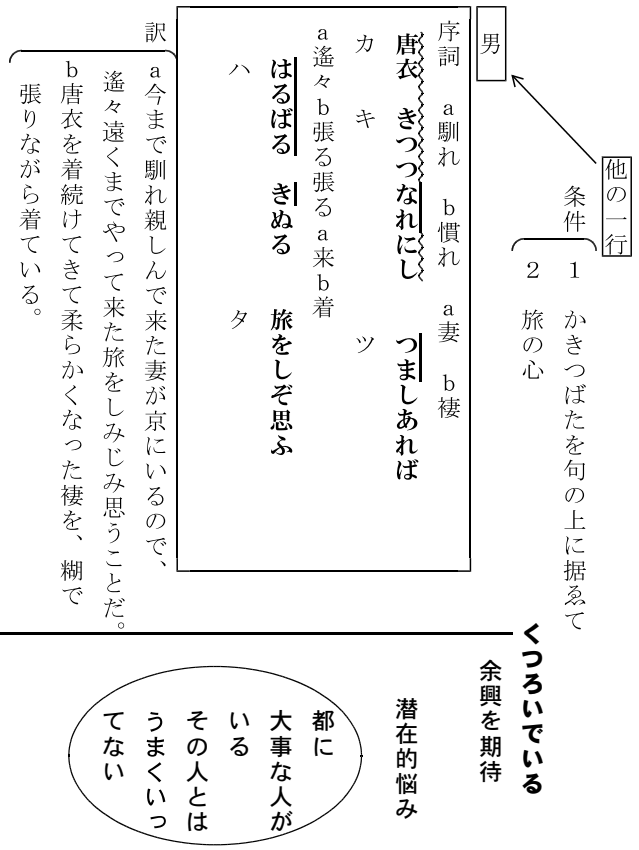
「東下り」では、「身をえうなき者」に思った男が、都を離れ東国へ行く。三河の国八橋で、かきつばたが咲いているのを見てある人に「かきつばたの五文字を歌の初めに置いて、旅の心を詠め」と言われ、男は次の歌を詠む。

14 唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

これは、折句と掛詞「妻・褄」「はるばる・張る」「来・着」と「唐衣」「褄」「張る」「着」と縁語も使われている。これほど技巧満載の和歌が、なぜその場にいた皆の涙を誘ったのか。

核心は、都に愛する妻がいるから（上句）、遠く離れての旅が悲しい（下句）、という内容である。たしかに縁語はたくさんちりばめられているが、一番大切なのは、この二つの内容を結合する縁語（具体的には、「褄」「張る」）であろう。これによって、妻を思うという形で旅愁がくっきりと定位された。おまけに、折句「かきつばた」の詠み込みによって、かきつばたの前にいる現在の心境として、その場の人の気持ちを代表して具現化したのである。（中略）業平の歌は、たんに望郷の悲しみを表現しているのではない。望郷の悲しみが、今この場所での逃れがたい運命であることを、言葉において実現しているのだ。（注５）

※板書



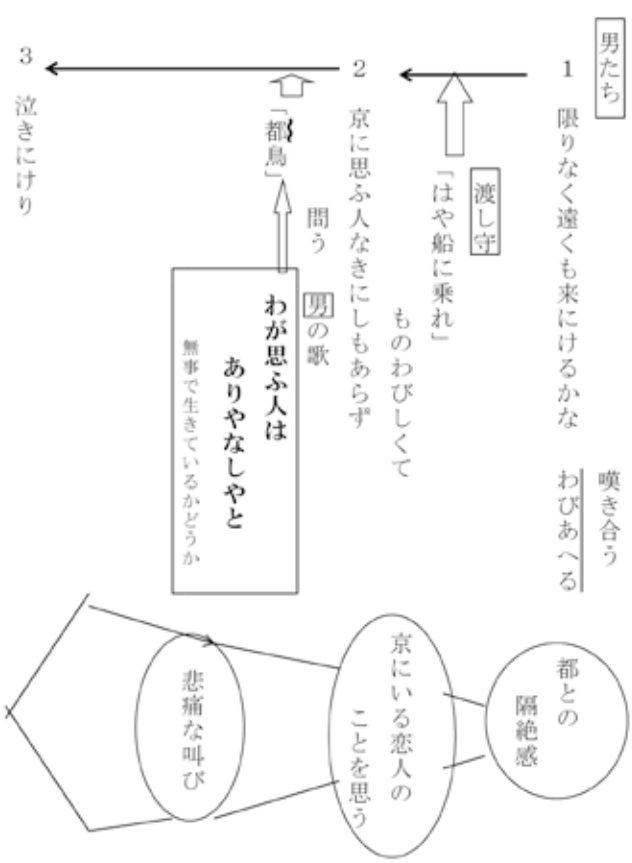
六

隅田川を渡る舟に乗ってから、鳥を見かけるが誰も名を知らず、渡し守に聞くと「都鳥だ」と言うのを聞いて詠んだ歌。

15 名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

舟に同乗していた人はこぞって泣く。

※板書



当時隅田川を越えたその先は全く違う世界と考えられていたため、一行は船に乗るのを渋っていたのだ。ようやく船に乗ったが、いた鳥の名を聞くと都鳥だというのを聞き、名前に都を持っている鳥にしか思う人の安否を問うことができないこのつらさを、一行が共感して泣いたものである。心情の高まりに注目して、和歌を読み取っていく授業を考えた。

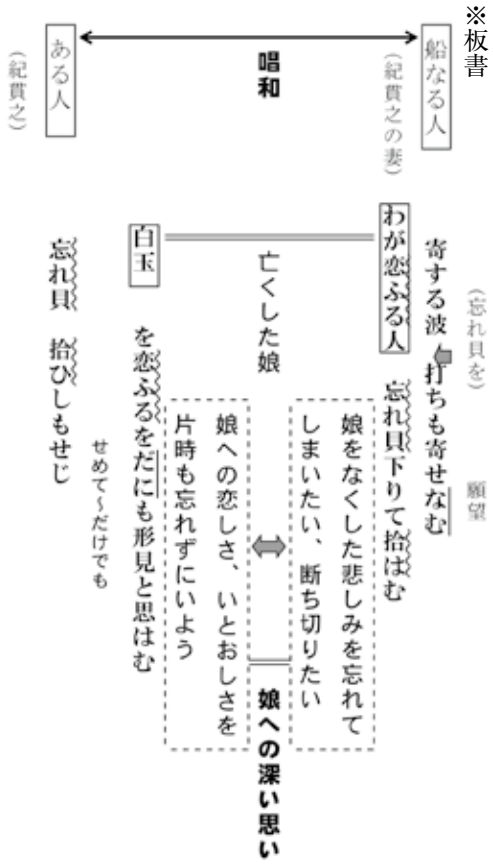
4 『土佐日記』「忘れ貝」悲しみを共有する者同士の唱和

京に帰る際に立ち寄った泊の浜には、美しい貝、石などが多くあった。それを見た人が詠んだ歌。

16 寄する波打ちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はむ
17 忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにも形見と思はむ

16が「船なる人」（紀貫之の妻）、**17**が「ある人」（紀貫之）の詠んだもの。土佐に赴任中亡くした娘を「わが恋ふる人」「白玉」と喩えており、忘れ貝を共に使っている。「忘れ貝」とはハマグリ科の一種で、二枚貝であることから、恋を忘れさせるという貝、離ればなれになった二枚貝の片方のことである。忘れ貝を拾って娘を亡くした悲しみを忘れてしまいたいと訴える妻に対して、夫は、忘れ貝は拾わずに、せめて娘を思う恋しさ、いとおしさは片時も忘れずにいようと言う。双方に娘への深い思いが表れ、幼い娘を亡くした癒されぬ悲しさ、つらさが伝わってくる。男親と女親の違いが現れているのだろうか。

※板書



5 『伊勢物語』「初冠」本歌取り

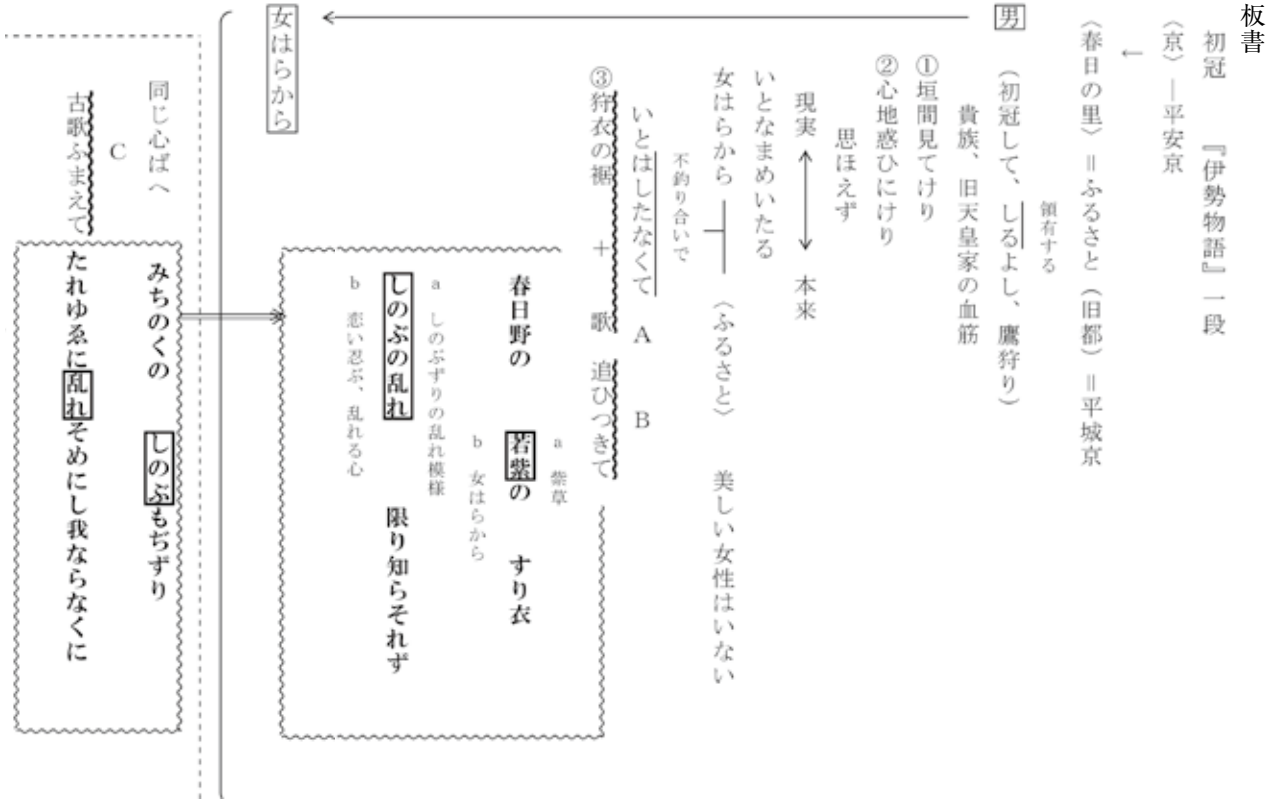
元服したばかりの年若い男が、奈良の都に鷹狩りに行く。そこで垣間見た女姉妹の美しさに心が動揺し、和歌を詠みかける。それも自身が着ていた狩衣の裾を切り取って、それに書き付けるという大胆な行動を取る。

18 春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限り知られず

それに対する返歌はない。書き手は、男の行動、和歌に対して「いちはやきみやび」と賞賛し、次の古歌を踏まえていることも説明する。

19 みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにし我ならなくに

※板書



作者　昔人はかくいちはやきみやびをなむしける。　評価
（今の人……しない）
A
B
C

八

6『今物語』「やさし蔵人」　後朝の歌

大納言は女の家の門から出ていく際、女が別れを惜しんで見送っている姿をみかけて、供の蔵人に後朝の歌を自分の代わりに言って来いと命ずる。困った蔵人は、何の考えも浮かばずに女の前に控えるが、折しも鶏が鳴く。女は歌人で有名であった。以前宮中で女の詠んだ有名な歌、

20 待つ宵に更けゆく鐘の声聞けばあかぬ別れの鳥はものかは

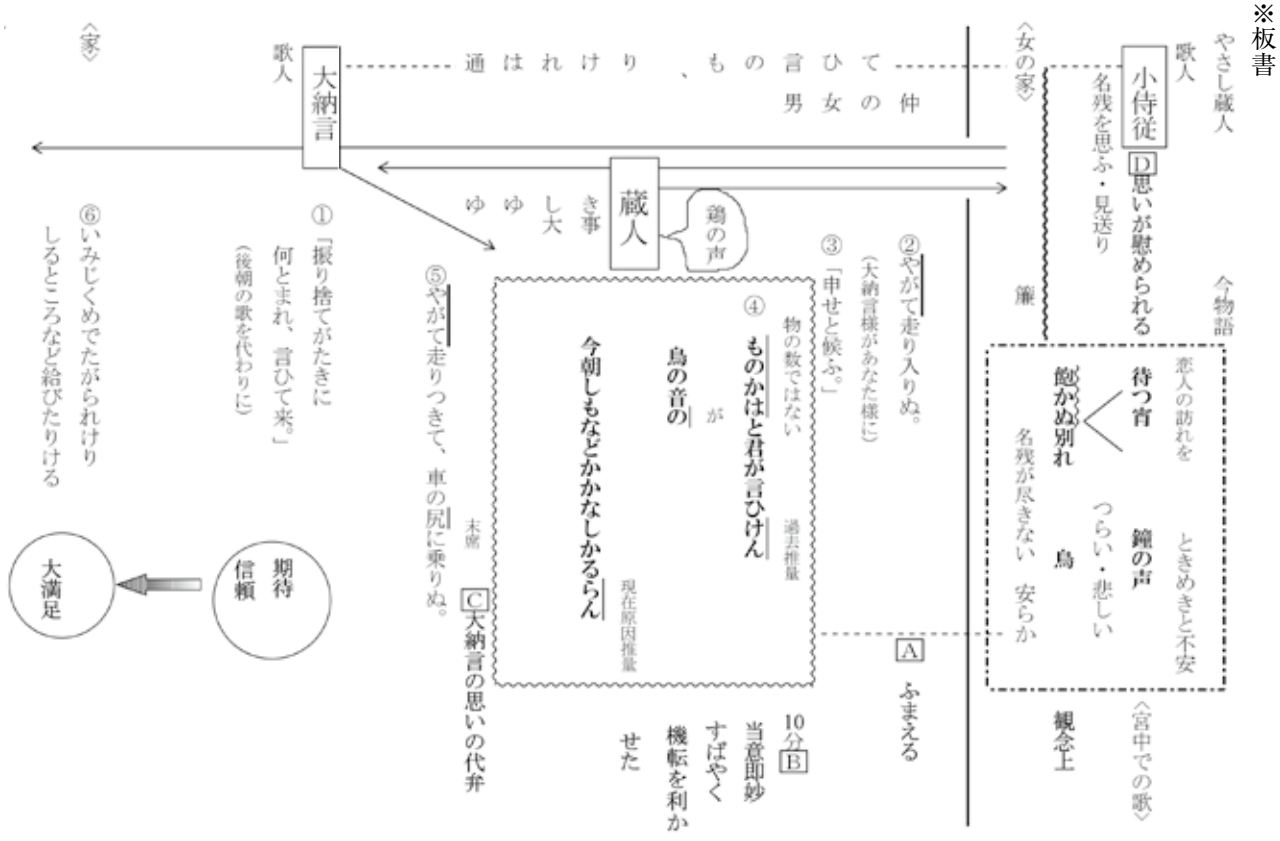
を思い出し、それを踏まえて蔵人が次の和歌を詠む。

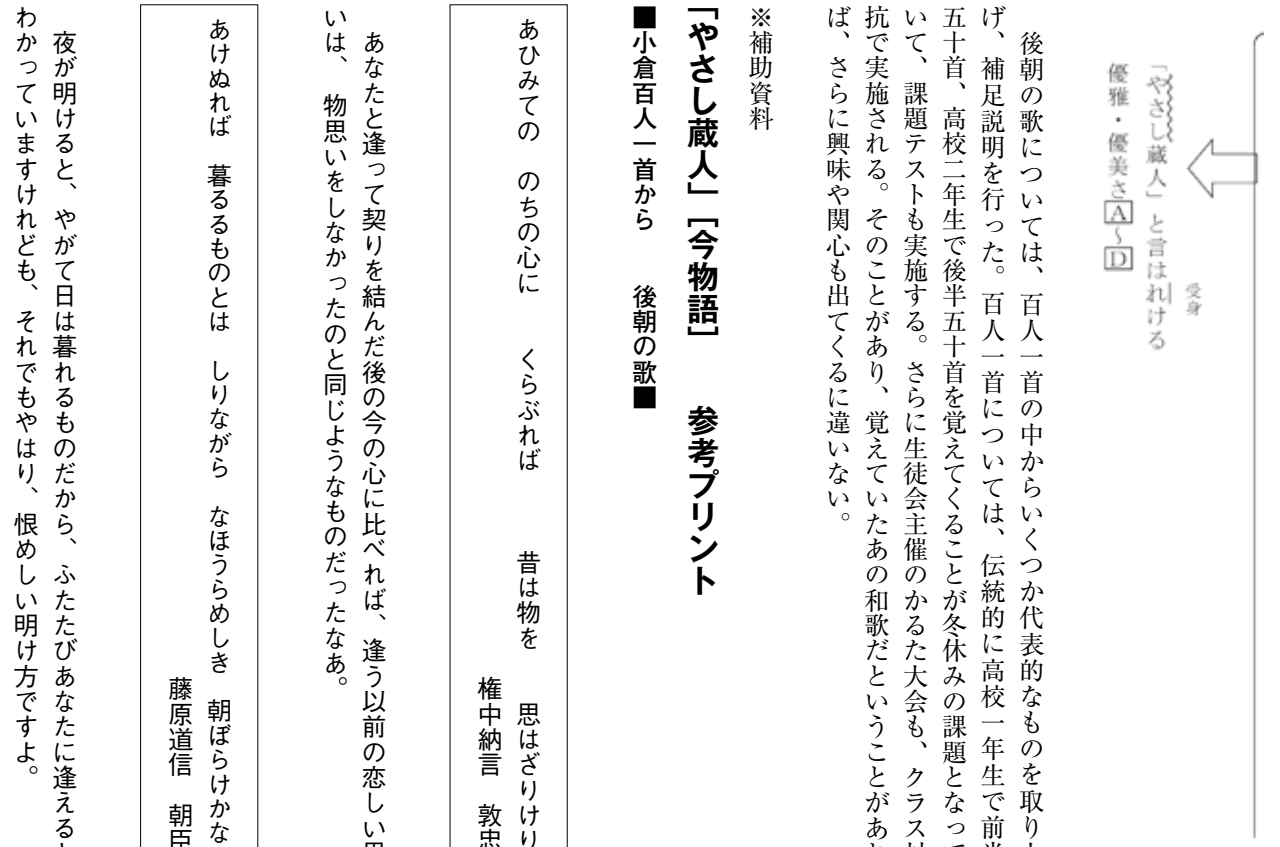
21 ものかはと君がいひけん鳥の音の今朝しもなどか悲しかるらん

来るべき人を期待しながらも危うんで待つ宵、しだいに夜は更けて初夜の鐘が鳴り、中夜の鐘も鳴ろうとするような時間帯（六時頃から十時頃）のときめきと不安である。その交差する思いを抱いて聞く鐘の声のせつなさに比べれば、たしかに朝の別れは「飽かぬ別れ」であるが、またの日の固い約束が信じられるなら安らかで、「待つ宵」の情緒の方が自分は好ましいと言っている。（注6）

待宵を勝るといって、暁の「あかぬ別れの身はものかは」と詠んだ小侍従の結句を、初句冒頭に据えて、いきなり「ものかはと君がいひけん鳥の音の」とうたい出した気息も実に気が利いて洒落ているが、内容も巧みに小侍従の元歌に反論しながら、「暁」の別れの「あはれ」を問いかけている。このたびの「暁の別れ」の情緒はまたとないでしょう、といっているのだ。（注7）

※板書





後朝の歌については、百人一首の中からいくつか代表的なものを取り上げ、補足説明を行った。百人一首については、伝統的に高校一年生で前半五十首、高校二年生で後半五十首を覚えてくることが冬休みの課題となっていて、課題テストも実施する。さらに生徒会主催のかるた大会も、クラス対抗で実施される。そのことがあり、覚えていたあの和歌だということがあれば、さらに興味や関心も出てくるに違いない。

※補助資料

「やさし蔵人」［今物語］　参考プリント

■小倉百人一首から　後朝の歌■

あひみての　のちの心に　くらぶれば　昔は物を　思はざりけり
権中納言　敦忠

あなたと逢って契りを結んだ後の今の心に比べれば、逢う以前の恋しい思いは、物思いをしなかったのと同じようなものだったなあ。

あけぬれば　暮るるものとは　しりながら　なほうらめしき　朝ぼらけかな
藤原道信　朝臣

夜が明けると、やがて日は暮れるものだから、ふたたびあなたに逢えるとわかっていますけれども、それでもやはり、恨めしい明け方ですよ。

九

君がため　惜しからざりし　いのちさへ　長くもがなと　思ひけるかな
藤原　義孝

あなたのためには、どうなってもよいと惜しくなかった命までも、逢うことのできた今は長くあってほしいと思うことですよ。

■小侍従の歌■

待つ宵に　更けゆく　鐘の音聞けば　飽かぬ別れの　鳥はものかは

あなたの訪れを待っている夜、その人は来ないで夜の更けてゆくのを告げる鐘の音を聞くと、そのつらさは、暁に心残りのまま別れの時に鳴く鶏の声の耐え難さなど物の数にも入りません。

7『源氏物語』「若紫」主従関係でのやり取り

北山で垣間見た尼君とその孫である少女から目が離せない源氏。女子に目を奪われていくのは、実はあの藤壺の宮に似ていたからと気が付き、禁断の愛を忘れることの出来ない罪深さに涙する。

その後、もう先は長くなさそうな尼君と女子の乳母であろう女房との和歌のやり取りがある。

尼君の歌

22 生ひたたむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき

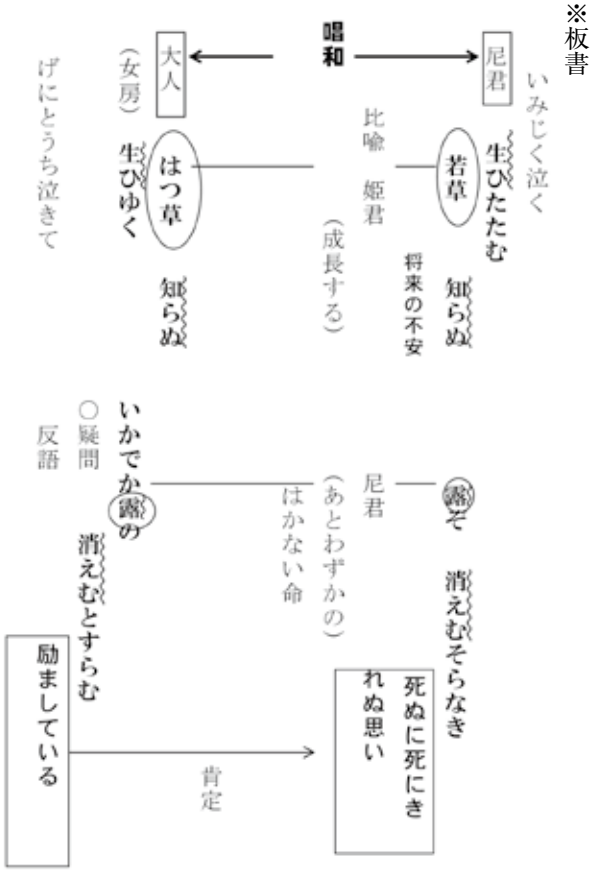
女房の返歌

23 はつ草の生ひゆく末も知らぬまにいかで露の消えむとすむ

兄の僧都から源氏が病気治療のため北山を訪れていると告げられ、垣間見は終わる。

尼君、女房二人の関係性がうかがわれる、姫君に対する愛情のつまった和歌のやり取りである。言葉が共通に使われ、唱和していることを示すのにはよい教材である。

※板書



一〇

8『大和物語』「苔の衣」同じ和歌の詠まれた背景の違い　戯れのやり取り

深草の帝が崩御された後、寵愛されていた良少将は姿を消してしまう。小野小町が清水寺に参詣した際、読経する法師がおり、良少将（遍昭僧正）ではないかと思い、送った歌、

29 岩の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣を我に貸さなむ（小野小町）

返歌が、

30 世を背く苔の衣はただひとへかさねばうとしいざ二人寝む（良少将）

やはり、その僧は良少将であった。すぐ会って話をしようと思ったが、もうどこにも姿はなかった。

この二首は、『後撰和歌集』にも収められているが、詞書が『大和物語』とは違っている。清水寺が石上寺に、小町は寺に参詣して勤行していたのに対し、日がくれたので帰るのを翌日にのばして寺にとどまっていた、良少将かどうか試すための和歌が、良少将がいると人から聞いて歌を読みかけた、後日談がないなどである。

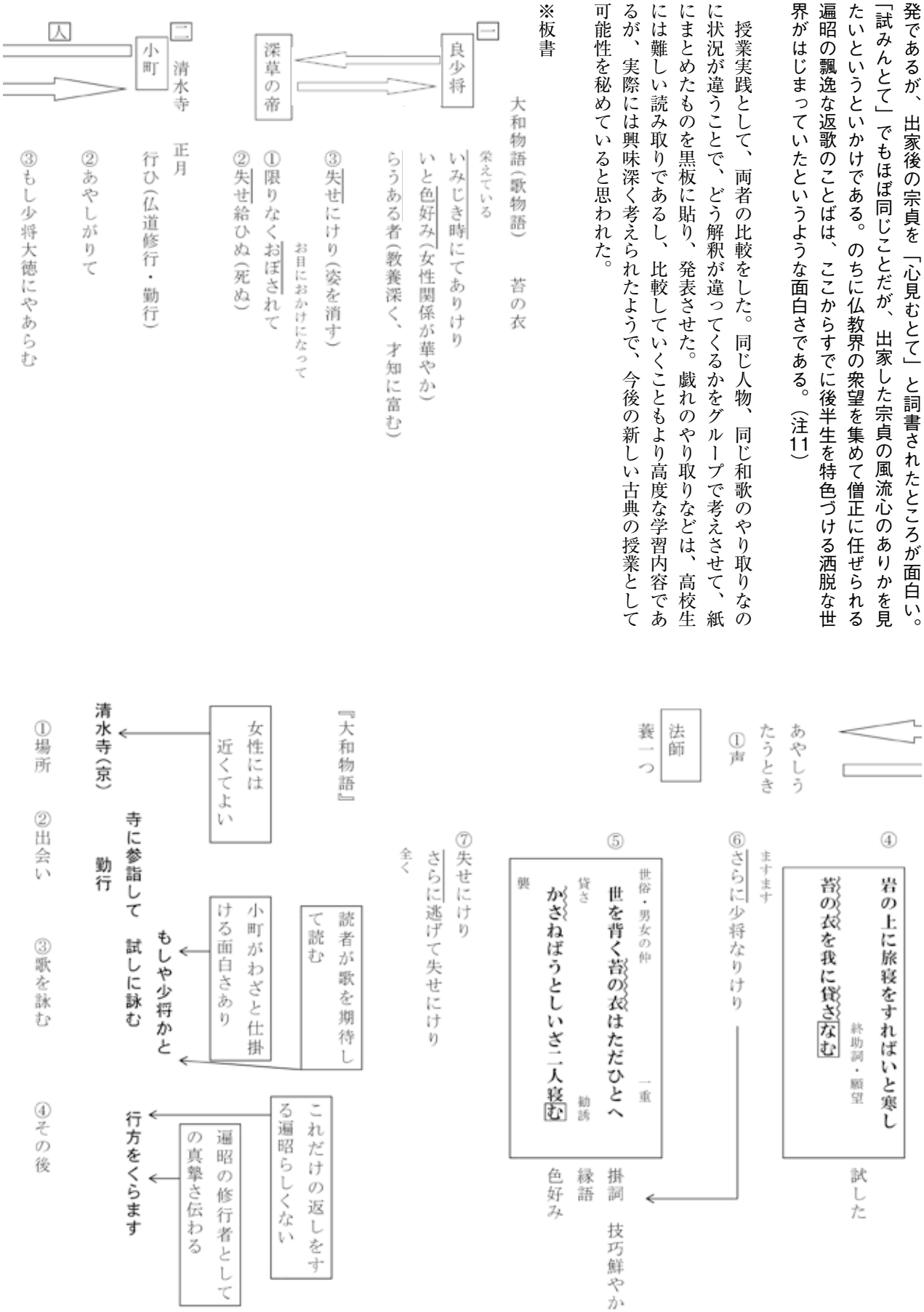
『後撰和歌集』については、

出家して修行中の歌友に、その衣を着たいということは明らかに戯笑的挑

発であるが、出家後の宗貞を「心見むとて」と詞書されたところが面白い。「試みんとて」でもほぼ同じことだが、出家した宗貞の風流心のありかを見たいというといかけである。のちに仏教界の衆望を集めて僧正に任ぜられる遍昭の飄逸な返歌のことばは、ここからすでに後半生を特色づける洒脱な世界がはじまっていたというような面白さである。（注11）

授業実践として、両者の比較をした。同じ人物、同じ和歌のやり取りなのに状況が違うことで、どう解釈が違ってくるかをグループで考えさせて、紙にまとめたものを黒板に貼り、発表させた。戯れのやり取りなどは、高校生には難しい読み取りであるし、比較していくこともより高度な学習内容であるが、実際には興味深く考えられたようで、今後の新しい古典の授業として可能性を秘めていると思われた。

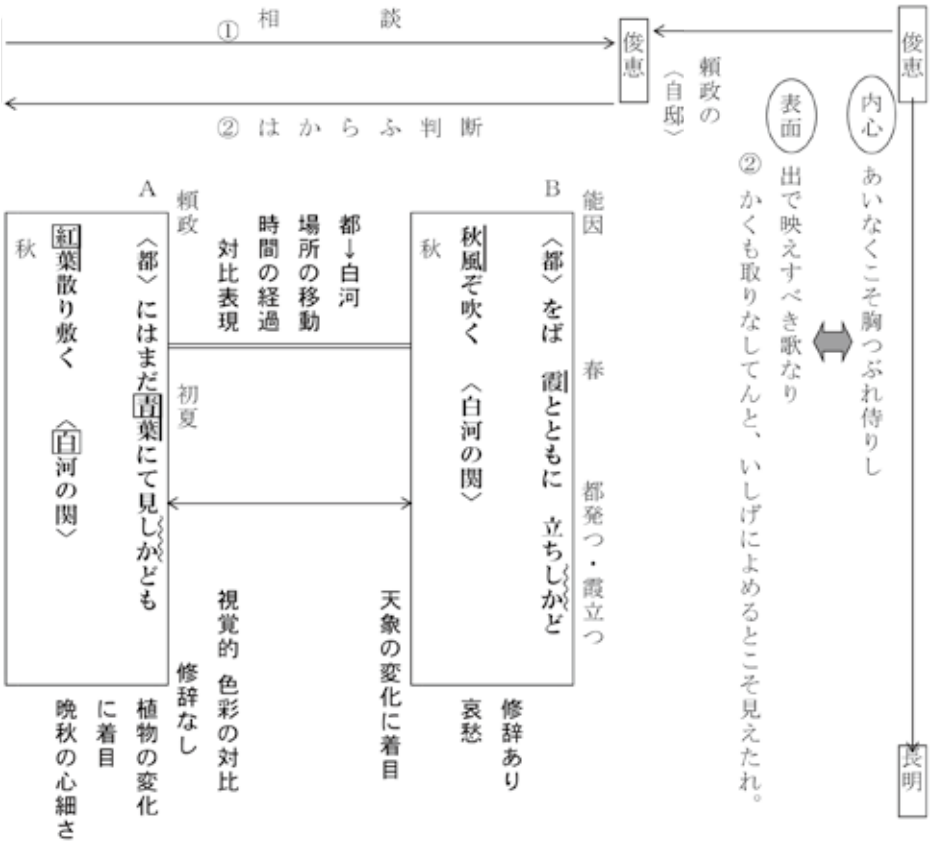
※板書



が、じつによく出ているではありませんか。（注8）

授業でも、季節の違いについては触れるが、さらに深い考察が必要だと分かる。同じ言葉が用いられた和歌の場合、真似をしていると批判を受ける可能性は現在の世でもある。本歌取りとは違った、比較を通して両者の違いを考察していくのに、格好の教材であろう。

※板書



9『無名抄』

（1）「関路の落葉」似た和歌の比較　本歌取りの効果

頼政が「関路の落葉」という題を与えられて歌合に参加する事になり、いろいろと作って迷った上、俊恵を自宅に呼ぶ。相談を受けた俊恵は、似ていると思われる能因の和歌と比べて見映えがするといって、太鼓判を押す。

能因の歌

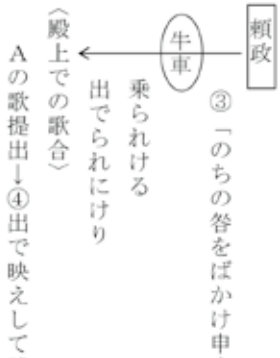
24　都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関

頼政の歌

25　都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散り敷く白河の関

能因法師の和歌の解釈としては、次のものがある。

春、霞が立つころに都を出発したが、ここ白河の関にたどり着いた時には、秋になってしまった、と歌っています。「たつ」は霞が「立つ」と都を「発つ」との掛詞ですね。いかにも春に旅が始まった、という感じを強めています。そして春から秋へ、旅をしているうちに半年近くも経ってしまったというのです。みごとに、都との距離感が表されていますね。しかも、霞立つ風景は、一年の始まりを象徴します。旅立ちにぴったりです。一方秋風は秋の始まりを表します。そして秋は、物事の衰退を象徴する季節です。草は枯れ、木の葉は散ってゆき、あらゆるものが死へ向かって衰えてゆく、哀愁の季節です。都を離れて、とうとうここまでやって来てしまったという感じ



（2）「深草の里」　本歌取り

五条三位入道俊成が俊恵に対して自讃歌として挙げたのは、

26 夕されば野べの秋風身にしみて鶉なくなり深草の里

これは、伊勢物語一二三段を踏まえている。授業でも確認するものだ。

男に飽きられ、新しい女の所へ行こうとする男が女に詠む。

27 年を経て住み来し里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ

女の返歌

28 野となならば鶉となりてなきをらむ狩にだにやは君は来ざらむ

歌に感動した男は、愛情を復活させたという話だが、あまりに単純すぎる結末と感じられる。

しかし、この和歌に関しては、次の解釈が参考になる。

地名の「深草」を草深い野と言い換えた男に向かって、その草深い野に住む鶉を導き出して対置し、さらに「狩り」「仮」の掛詞を用いて、たまさかの訪れでもいいからと切望する。そういう言葉の技巧を視野に収めるべきだろう。すでに、掛詞や縁語の章で、これらの技巧が、偶然性に大きく依存していることを確認し、そのことがかえって、逃れがたい運命的な感覚を喚起するのではないか、と述べた。女を見捨ててここがその名の通り草深い荒野となる、という自分の吐いた言葉が、女によって逆手に取られてしまった。それだけに男は、「鶉を狩り」に来る、すなわち女の所に戻ってくる運命に逆らえなくなる。言葉にからめ取られ、身動きできなくなったのである。内容のいじらしさと、掛詞や縁語の威力が相乗効果をもたらして、男の心と行動を拘束する。贈答歌の魔力の源泉を、そのあたりに垣間見てはいかがであろうか。（注9）

また、女の歌を本歌取りした俊成の歌についても比較されている。

俊成は、場面はそのままにして、時間・季節を加え、冷たい秋風が「身にしみ（る）」という体感を加えた。（中略）「秋風」は男が女に飽きたことをあらわします。「秋」は「飽き」の掛詞です。男の心は深草をかき分けて吹いてくる秋風のように冷たく変わったというのです。それなら「秋風身にしみて」はだれの「身にしみる」のでしょうか。作者の俊成でしょうか。男に捨てられる一二三段の女、それとも鶉でしょうか。捨てられた女が鶉になって待つというのですから、女ではなく鶉とみるべきです。

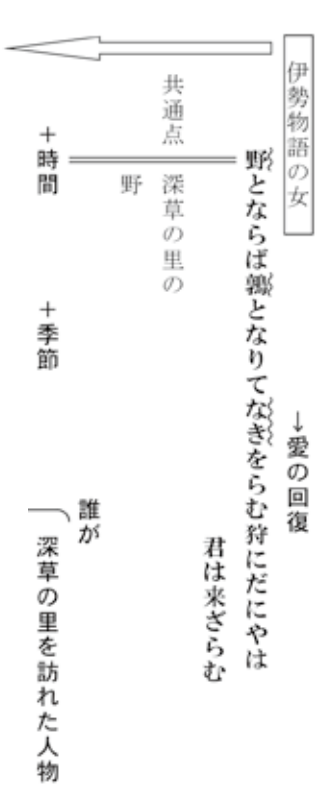
しかし私達は一二三段を知っており、それと比較して俊成の歌を鑑賞します。そういう読者には鶉の姿が胸に痛く感じられ、鶉とおなじように「秋風」が身にしみてきます。なかには、俊成自身が一二三段をそう読み取って詠んだのだろうと思う人もいるでしょう。この歌は、読者側のさまざまな想像を許容する意味の深い歌になっています。

それと関連して、もう一つ注意すべき事があります。一二三段は二人の愛の回復を語って閉じられますが、俊成の歌はどうでしょう。「夕」は男が愛する女のもとにやってくる時間です。なのに冷たい秋風が吹き荒んでいる。俊成が新しく設定したこの場面は、二人の愛はひとたびよみがえり、やっぱり破局に終わったと物語っているように見えます。

俊成は一二三段のあとに続く、さらに悲しい愛の結末を構想したのではないでしょうか。わずか三十一文字の和歌の中に、物語のその後を想像させる前衛的な試みをしたように思われます。（注10）

この解釈を踏まえると、以下のような板書が考えられる。

※板書



夕されば野べの秋風身にしみて　鶉なくなり深草の里

俊成

男が女の所に　飽き

やってくる時間

×一二三段の女

○捨てられた女の化身である鶉

読者自身

↓復活した後破局へ（新たな創造）

10『蜻蛉日記』「うつろひたる菊」　真剣な歌にすかす返歌

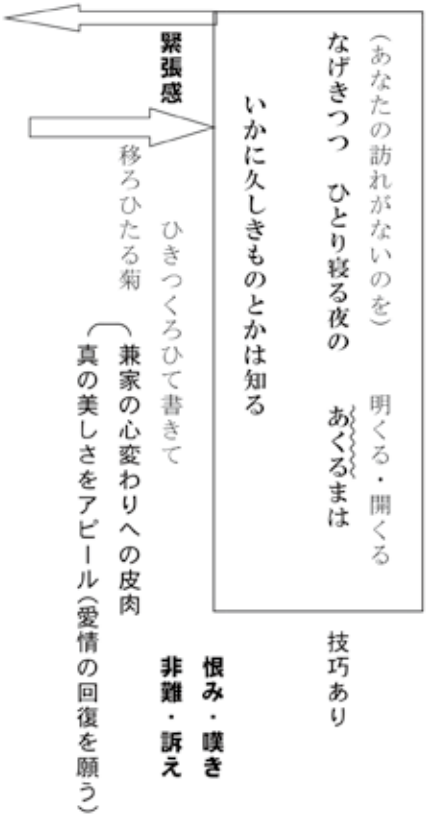
夫兼家が他の女に贈るための手紙を文箱の中に見つけてしまった作者は、見たただけは知らせようと和歌を書き付ける。その後、兼家と町の小路に住む女との結婚を確認した作者は、兼家が訪ねて戸をたたいたが、開けずにいたら、兼家は待つこともなくすぐに町の小路に住む女の所に行ってしまう。やはりこのままではすましておけないと思った作者は、意を決して歌を送る。

31 なげきつつひとり寝る夜のあくるまはいかに久しきものとかは知る

しかし、返ってきた手紙と和歌は、その気持ちを受け止めたものではなかった。

32 げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸もおそくあくるはわびしかりけり

※板書



一応返しただけ　すかしている

兼家（右大臣の三男）

げにやげに　冬の夜ならぬ　真木の戸も

おそくあくるは　わびしかりけり

あくるまでもこころみむ（ウソ）

技巧なし

表面的な事実のみ

相手の思いを

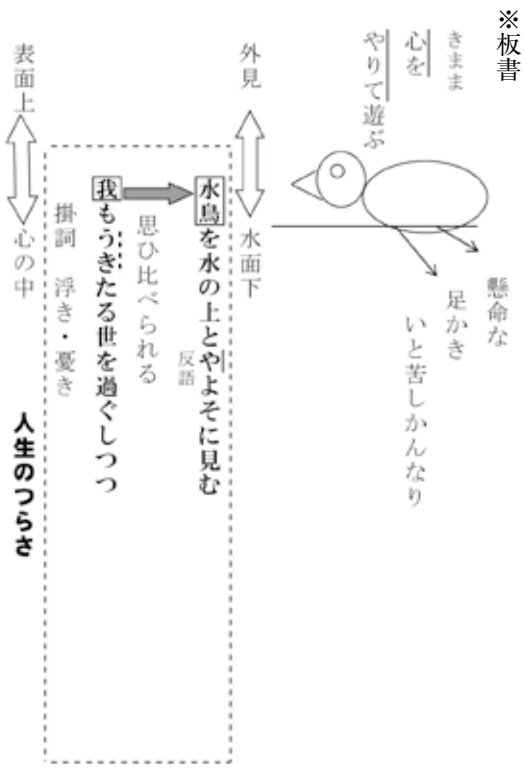
受け止めず

11『紫式部日記』「若宮の誕生」　苦しい思いを吐露する独詠歌

土御門殿で中宮彰子は敦成親王を出産した。赤子からおしっこをかけられても悦ぶ藤原道長を初め、天皇の御幸を控えて邸内全体がうきたっている中、作者は一人違和感を覚え、苦しい思いを歌に記す。

33 水鳥を水の上とやよそに見む我もうきたる世を過ぐしつつ

※板書



一四

水鳥と自分の共通点を見ている紫式部の苦しい思いは、地の文も合わせて組み入れながら考えさせていくと理解される。思いが吐露した独詠歌として、是非学ばせたい和歌である。

四　まとめ

実際にシラバスにある教材で和歌を含むものを取り上げていったが、『竹取物語』を除いて、他のものはそれぞれ中心に学習すべきテーマや修辞技法、贈答歌における両者の関係性、独詠歌など、多岐にわたっていて、和歌の学習内容としては大部分が網羅できていると思われた。読解が複雑で難しいものは、高校三年生に置かれていた。今回取り上げたのは、割合定番のものであると思うが、『今物語』などは最近新しく取り上げられている。学校で採用する教科書によっては、入っていなかったり、別のものもあるので、三学年全体を見回しての教材編成を考えることが必要となる。

大切なのは、この教材では何をメインとして和歌を指導していくのかという目的意識を授業者が持つことであろう。高校三年間で、和歌文学の重要なことが網羅できるよう、高校一年から授業者が確認していくことが必要になってくる。シラバスには学習目標を書くが、和歌に目を向けた学習課題も意識して入れていくとよいと思われる。

他の教材についても、より適切な和歌の学習内容が入っているものを今後探していきたい。

注

1　小林一彦、「掛詞」、渡部泰明編『和歌のルール』、笠間書院、２０１４年、第４章、68。
2　谷知子、「『竹取物語』の和歌―不定形なテキストの矛盾」、谷知子・田渕句美子編著『平安文学をいかに読み直すか』、笠間書院、２０１２年、第二章、51。
3　注2、同。
4　大浦誠士、「序詞」、注1、同、第２章、40。
5　渡部泰明、『和歌とは何か』、岩波新書、２００９年、pp83～84。
6　馬場あき子、『日本の恋の歌～恋する黒髪～』、角川学芸出版、２０１３年、pp197～198。
7　注6、同。
8　渡部泰明、『古典和歌入門』、岩波ジュニア新書、２０１４年、131。
9　注5、同。pp149～150。
10　錦　仁、「本歌取り」、渡部泰明編、『和歌のルール』、笠間書院、２０１４年、第６章、pp87～88。
11　馬場あき子、『日本の恋の歌～貴公子たちの恋～』、角川学芸出版、２０１３年、121。